

青銅鳥型器 中国漢時代（高さ16cm、長さ16cm、幅12cm）

鳥居の起源や語源については中国やインド発祥等諸説あり、どれが正しいとする事は出来ないが、何れにしても、神域と人間が住む俗界とを区別する為の「結界」という事に異論はないようだ。古代中国では、

鳥は天帝の言霊を伝える使者で、天上から地上に降りた時の止まり木として鳥居が作られたとされていた。他の古代王朝やマヤ文明等、鳥は天と人を繋ぐ特別な存在とされてきた。それだけに古代からその姿形が図案化され、時にデフォルメ

されながら、宗教や日常生活のなかにも取り入れられてきた。掲載の青銅鳥型器は中国漢時代（前202〜後220）の物。胴の部分がこの時代の特徴である卵を縦半分に分けて両側に張り出しを付けた「耳



杯」と呼ばれている形で、これは陶器でも金属器でも作られていて、当時大いに流行した。珍しいのはその耳杯に鳥の頭部と足を付けて鳥として完成させた事で、足の部分を持って尻尾から酒を飲んだのだろうか。

か。この銅器が鳥型という事を考えれば、何かしら儀式の際に使われた特別な器だと想像できる。首の部分がやや押し潰されていく感じなので、本来はもう少し直立していたのかも知れない。現代アートにも通じるフォルムは、近未来的な建築空間に置いてても違和感はなくマッチすると思うが、如何だろうか。混沌とした現在に降り立ったこの鳥は、天からどんな言霊を託されてきたのだろうか。

スペイン飾り棚（高さ67cm、幅21cm、1830～1860）

1492年イベリア半島で繰り広げられていた国土回復戦争（レコンキスタ）は、イスラム教国最後の砦グラナダの陥落で終結する。その後スペインは大航海時代に突入し、アメリカ大陸やアジア諸国を次々に植民地化して、

それらの国々から略奪した莫大な量の黄金や貴重な品々を蓄積していった。止めどなく入ってくる富は決して民衆には行き渡らず、王や貴族、そして宗教家や教会等が独占し

ていた。今も残るそれらの教会に一歩足を踏み入れると、荘厳な装飾に圧倒されてしまふ。惜しげもなく使われている黄金だけでも相当な量で、これらのゴシック建築は具象化の極みで華麗ではあるけれど、日本



人の目には装飾過多に見えるのではないだろうか。掲載の棚は19世紀、南グラナダで作られた物。大きな食器棚をそのまま小さくしたようで愛らしい。扉は観音開きになっていて、中は二段の仕切板と小さな引出しがついている。両扉に獅子の顔と正面上部に依頼主らしき横顔がブロンズで作られ取り付けられてある。アルハンブラ宮殿へ向かう広場近くの骨董店で見付け、持ち帰る時の苦労も考

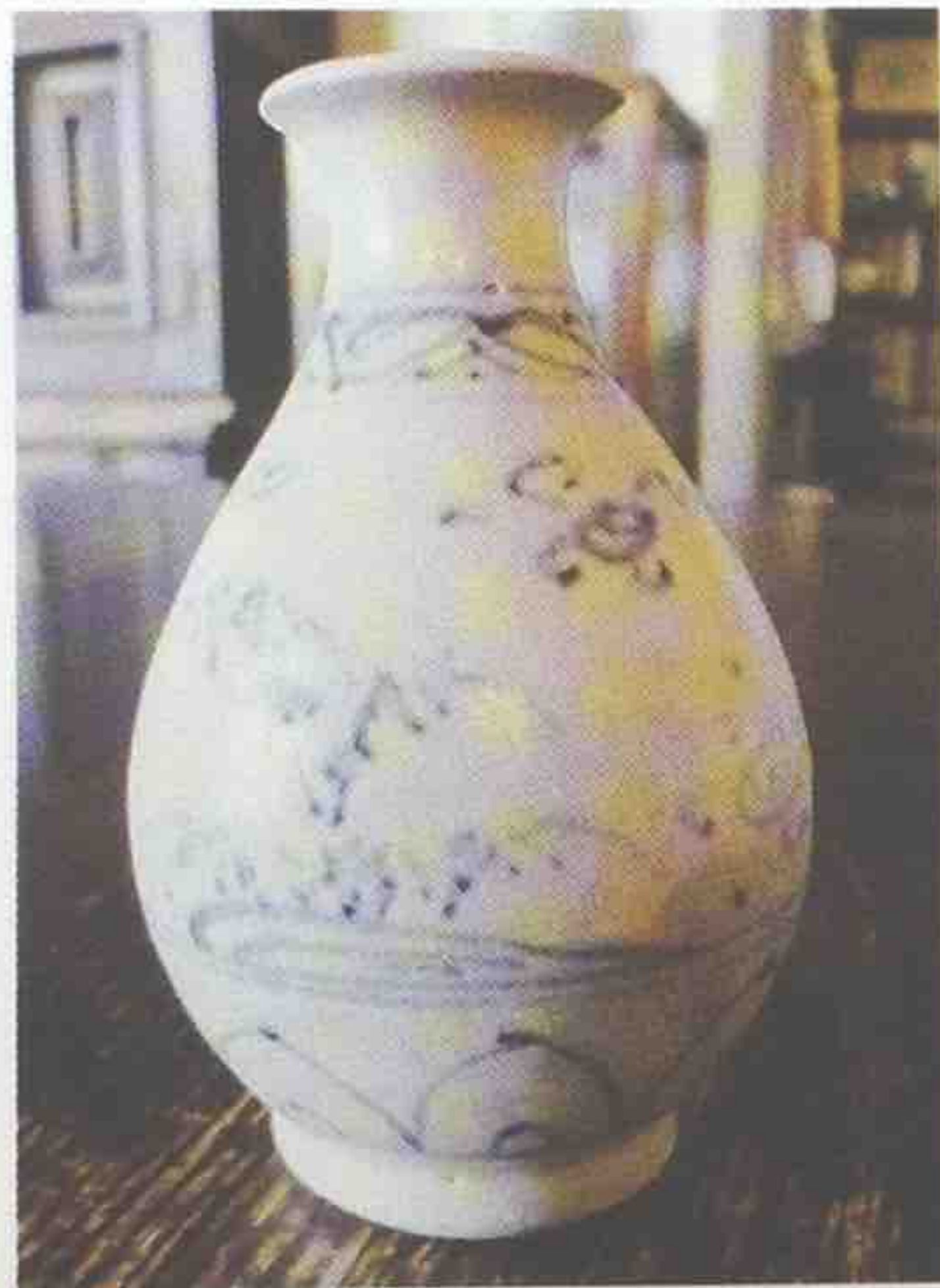
えず購入した。日本の小ダンスや指物の箱とはまた違った魅力がある。人でも物でも共鳴し合う何かを見出した時、急に親しみの感情が沸き愛おしくなってくる。私の心根にはこれ位の装飾が丁度心地良い。

安南染付小瓶 (高さ10.5cm、胴7.0cm、口径2.3cm、15~16世紀)

身近に使える骨董品のなかに酒器がある。時代や産地、素材や形状等様々あり、必ず自分のお気に入りが見付かる。初めは目についたものをむやみに購入してしまうが、使っているうちに徐々に好みの酒器に落ち着く。また、一度仕舞い込んだ物でも年齢と共にその

良さや見所に気づき、再び使いたす事もよくある。何よりも土物と呼ばれるている陶器質の肌は、使い込む程に「味」が出て一層愛着が湧いてくる。価格もピンキ

りで、有名な伝世品等はとても私の手に届くところではないが、値が安くても良い物も見付かるのが酒器の面白いところ。それだけ広く深く物が隠れている。掲載の小瓶は15~16世紀の安南陶。沈没船から引き揚げられた大量の安南陶のなかにも数は少な



いが見受けられるので、輸出用として作られた事は確かだが、その用途となると想像の枠を出ない。やや下膨れで首が締まり、くすんだ呉須で竹と雲、太陽を描いている。片手にすっぽりと収まる位小振りで、元より呑んべいには見向きもされまいが、お気に入り

に入りの盃で3~4杯楽しむ向きには良いだろう。これも骨董の「見立て」という楽しみ方のひとつ。こうした時代もあり、見所もあり、使って楽しめて、大金を出さなくても購入できる物があるのだからありがたい。良い物が無くなった、見付からないと嘆くより、自分の目を鍛えれば、世の中にはまだまだ見捨てられて埋もれたまま、「早く見付けてくれよ」と言っている多くの物がある。



## 高麗青磁菊象嵌合子（高さ2.8cm、径7.8cm、12世紀末）

30数年前、韓国訪問の際に楽しみにしていたのが、旧朝鮮総督府庁舎を利用した国立中央博物館を訪れる事だった。1926年（大正15年）日本の植民地時代に造られた総督府庁舎は近代の西洋建築を代表する建物で、中に展示されていた素晴らしい美術・工芸品や、歴史ある文物とも同化していて、真に重厚で博物館と呼ぶに相応しいと思っていた。しかし、民族の自尊心はそれを許さず、移築では無く取り壊しという選択をした事は誠に残念だった。しかし、当事者側から見ればこれが当然で、個人の思い入れなどは取るに足らない感傷なのだろう。博物館の中に高麗青磁（高麗時代918〜1392年に作られた焼物）を展示している一室があり、日本では見る事が出来ない優品や珍しい物を見る事が出来た。初期の高麗青磁は中国磁州窯などの影響を受けながらも、



11世紀頃にはその青磁色は中国にも優るとされ、翡色青磁の名で中国にも輸出された。また、高麗独自の技法として、胎土が生乾きの時、そこに文様を彫り込み、別の白土や黒土を埋め浅く削り取った後、青磁釉を掛けて焼成する象嵌技法があり、線画とは違う独特の美しさがある。掲載の合子は本来化粧道具の一つで、もっと大きな盒と呼ばれる蓋付の入れ物の中に何個か入れ、それぞれの用途に応じて使い分けていた。上蓋に花と蕾を白土で、葉を黒土で象嵌し、側面を細かく削り落として文様を際立たせている。やや灰色を帯た青磁釉から12世紀末の物。最盛期の翡色青磁には及ばないが、それでも高麗青磁の品位が保たれているのはさすがと言うべきだろう。

本年も宜しくお願い致します。